memo

# 消費者教育 実践事例集

第124回

## 自分の体調を自分の言葉で伝えよう

-主体的に医療にかかわる [医療消費者] を幼児期から育む-

田村 久美 Tamura Kumi 川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部 准教授 現職着任をきっかけに、医療消費者概念の探究など、医療に関する消費者教育研究に着手。 現在は、理論から実践研究へ展開。著書に「医療消費者論」(泉文堂、2016年)がある

#### 幼児期からの医療消費者教育の必要性

医療消費者とは、「自分の身体を健康にする手 段として医療サービスを受療し、その対価とし て医療費を払い、治療方法や薬、医療費などの情 報を患者の立場で責任を持ち知ろうとする人 です。こうした人を育成する医療消費者教育と は、医療領域における人間の生涯の発達段階に 応じた消費者教育といえます。しかし、専門性の 高い医療サービスを受けるとき私たちは、医師 など医療従事者の判断に委ねがちになったり、 疑問点を聞くことを躊躇します。既往歴や症状 を詳細に伝えられない場合もあります。一方で、 正確な診断を得るためには、患者参加は欠かせ ません。まずは、自分の身体の不調を知り、伝え る意識と行動が医療消費者の基本行動といえま す。この意思表示を当たり前にできるようにな るためにも、幼児期からの育みが重要です。

#### 岡山県消費生活センターとの連携

2019年に立ち上げた被害防止応援団「吉備団」は、川崎医療福祉大学で私が指導しているゼミ生(3・4年次)で活動する消費者教育ボランティアです。2020年に、岡山県消費生活センター(以下、県センター)のボランティア講師派遣に登録したことで活動体制が整い、講座対象は高齢者、視覚障がいや聴覚障がい、知的障がいの高校生などに広がりました。学生は卒業後に、医療事務職に従事するため、多様な人とのかかわりは大変貴重な経験の連続です。そして、この活動が一時的なものにならないよう継続性を実現する鍵となるのが、内部と外部のコーディネーターの存在です。前者は担い手となる大学

生と行政等をつなぐ教員です。後者は担い手と 関係団体や行政をつなぎ、活動を円滑化させる 県センターと消費者教育コーディネーターで す。本稿で紹介する、幼児を対象とする医療消費 者教育も県センターとの連携で実現した活動の 1つです。

#### 保育園で実施した医療消費者講座

2023年11月、岡山県内の保育園(年長[5~6歳児]19名)で講座を実施しました(**写真**)。講座目的は、①幼児が自分の身体の変化や状態を他者に伝え、自身の情報を知らせることの意味を理解させる。②家族(家庭)や保育士(園)、医師等(病院)に自分のことを伝える(行動する)ための表現方法や状況対応を理解させる。③園や家庭の協力を得て、講座での学びを日々の生活に活かせるよう習慣化させることです。

子どもの集中力を高めやすいペープサート (紙人形による寸劇)では、主人公「うさた」(うさぎ)、主人公の友達「ニャンちゃん」(猫)、園の先生「パンダ先生」、主人公の保護者(うさぎ)、医師「ヤギ医者」が登場します。寸劇は2つのストーリーです。前半は、"主人公うさたが自分の不調(お腹が痛い)を伝えられず泣いてばかり、ニャンちゃんやパンダ先生を困らせる。迎えに来た

#### 写真 幼児を対象とした医療消費者講座の場面



### 消費者教育実践事例集

保護者と病院に行き診察を受けるが、医師から「どこが」「どのように(痛いか)」「いつから(痛いか)」を尋ねられても何も答えない。代わりに保護者が答える"というものです。後半は、"うさたが自分の不調(お腹が痛い)を友達や園の先生に伝える。保護者と病院で受診するときも医師の問いかけに自分で答える"という展開です。前半と後半の間には、「なぜ、うさたは泣いてばかりで、何も答えなかったのか」など振り返りの問いかけをします。園児達は、自由に返答をしてくれたり、隣に座っている子と話し始めます。このように自分の考えを声に出すことも、相手に伝える訓練となります。

さらに、学習の継続性と習慣化をねらいとする2つの事後学習を作成しました。1つは、不調を伝える指標となる14の症状を表す行動イラスト(例えば、頭が痛いしぐさをしているうさぎのイラスト)を園内に掲示してもらいました。もう1つは、家族を巻き込み実践する演習シート(手作りシール付き)です(図)。子どもに、楽しみながら毎日繰り返し体調を保護者に伝える行動を促すことを目的としたものです。

本教材の成果が出るよう、また寸劇は幼児の 集中力を欠かずに最後まで観賞できるよう工夫 し、さまざまな情報を得て試行錯誤しました。ゼ ミ生の家族や知人の保育士、子育て真っただ中 の方、孫のお世話をする方に、講座で使用する

#### 図 制作した演習シート



イラスト:いらすとや うさたとのやくそくシート作成:被害防止応援団 吉備団

「言葉の選択」の助言をもらったり、ペープサートや小道具作成、リハーサルは高齢者などへの講座経験を活かしました。保育士による演劇の動画を見てアイデアを出し、話すスピードや登場人物に合った声色などを反復練習しました。準備期間を要し夏休みを返上しましたが、全員協力で完成させました。ゼミ生も私自身も消費者教育の創生に携わり、この経験は付加価値のある貴重なものと感じています。吉備団のモットーは「挑戦することを楽しむ」です。時にはゼミ生内のゴタゴタもありますが、「私たちが消費者教育の担い手となり発信する!」という強い思いを忘れずに、県センターのサポートをいただきながら活動しています。

#### 寄せられた感想

保育園での実践前のリハーサルとして、消費者教育コーディネーターの発案から、地域で活動する団体を通じ4世帯(2~7歳の子ども9名、保護者4名)へ講座を行いました。この実現も、外部コーディネーターとの連携ポイントといえます。講座終了後に得た感想は、「寸劇と同じ出来事があり、子どもは我慢していた。やはり不調があるときは保育士などに言えるようになってほしい」「受診時に、医師からの問いかけに、親が先に口を出してしまう。子どもに言わせるようにしないといけないと思った」などがありました。

また、保育園での講座では、実施後に園児から「朝、うんちが出た」など自分の体調を保育士に報告する子どもがいたと園長から聞きました。

#### 今後、望むこと

本講座内容を、一人でも多くの幼児に届くよう教材化し、全国の幼児の保育や教育の場で実施できれば、幼児だけではなく、大人である保育士や保護者等も医療消費者行動について考えてもらう素地ができるのではないか、と思います。

私たち吉備団の活動はまだまだ続きます!